







第1章

誕生から尾張平定

天文3年（1534）～永禄9年（1566）

【信長 1歳～33歳】

第1章

誕生から尾張平定

天文3年（1534）～永禄9年（1566）

【信長 1歳～33歳】

天文　3年（1534）	1歳	織田弾正忠信秀の嫡男として誕生
天文 15年（1546）	13歳	古渡城で元服、三郎信長と名乗る
天文 16年（1547）	14歳	三河の吉良大浜にて初陣
天文 17年（1548）	15歳	美濃斎藤道三の娘と婚姻（天文18年説もあり）
天文 21年（1552）	19歳	父信秀病死、家督を継ぐ（天文17・18・19・20年説もあり）
		清須城家老の坂井大膳らと萱津で戦い勝利
天文 22年（1553）	20歳	平手政秀自刃　斎藤道三と正徳寺で会見
天文 23年（1554）	21歳	今川方の村木城攻略
弘治　元年（1555）	22歳	守護代織田彦五郎（信友）を自刃させ清須城を奪う
弘治　2年（1556）	23歳	斎藤道三敗死
		離反した林秀貞、弟信勝家臣柴田勝家らを破る
弘治　3年（1557）	24歳	長男信忠誕生（母は生駒家宗娘）
永禄　元年（1558）	25歳	弟信勝を誘殺
永禄　2年（1559）	26歳	上洛して将軍足利義輝に謁見
永禄　3年（1560）	27歳	桶狭間の戦いで今川義元を破る
永禄　4年（1561）	28歳	美濃の斎藤義龍急死　美濃に出兵して龍興軍を破る
永禄　5年（1562）	29歳	徳川家康と同盟を結ぶ
永禄　6年（1563）	30歳	小牧山城を築き清須城より移る
永禄　8年（1565）	32歳	将軍義輝討たれる　犬山城を攻略
		養女を武田勝頼に嫁がせる

1－1　織田氏の歴史

戦国時代、守護大名による領国支配の体制には守護、守護代、奉行などの役職がありました。信長は、尾張国八郡のうち下四郡の守護代を務める清須織田家三奉行の中の一つ、織田弾正忠家に生まれました。

守護職斯波氏の守護代を務める織田氏

室町時代、幕府の守護領国制の下、各地には守護大名が置かれ、国を統治していました。守護大名の下には守護代という補佐役が配置され、織田氏はその守護代を務める家柄でした。

1400年以降、越前、尾張、遠江の守護職である斯波氏の下、織田氏は尾張守護代を務め、世襲するようになり、この頃、織田一族が越前から尾張へ移り住んできたといわれています。

織田氏の惣領家（本家）は伊勢守（岩倉織田氏）と呼ばれ、斯波氏の中では、甲斐氏に次ぐ重臣でした。伊勢守は、斯波氏とともに京に留まり中央政界で執務に当たる傍ら、尾張国においては守護代（家臣）として、大和守（清須織田氏）を配置し国を治めていました。

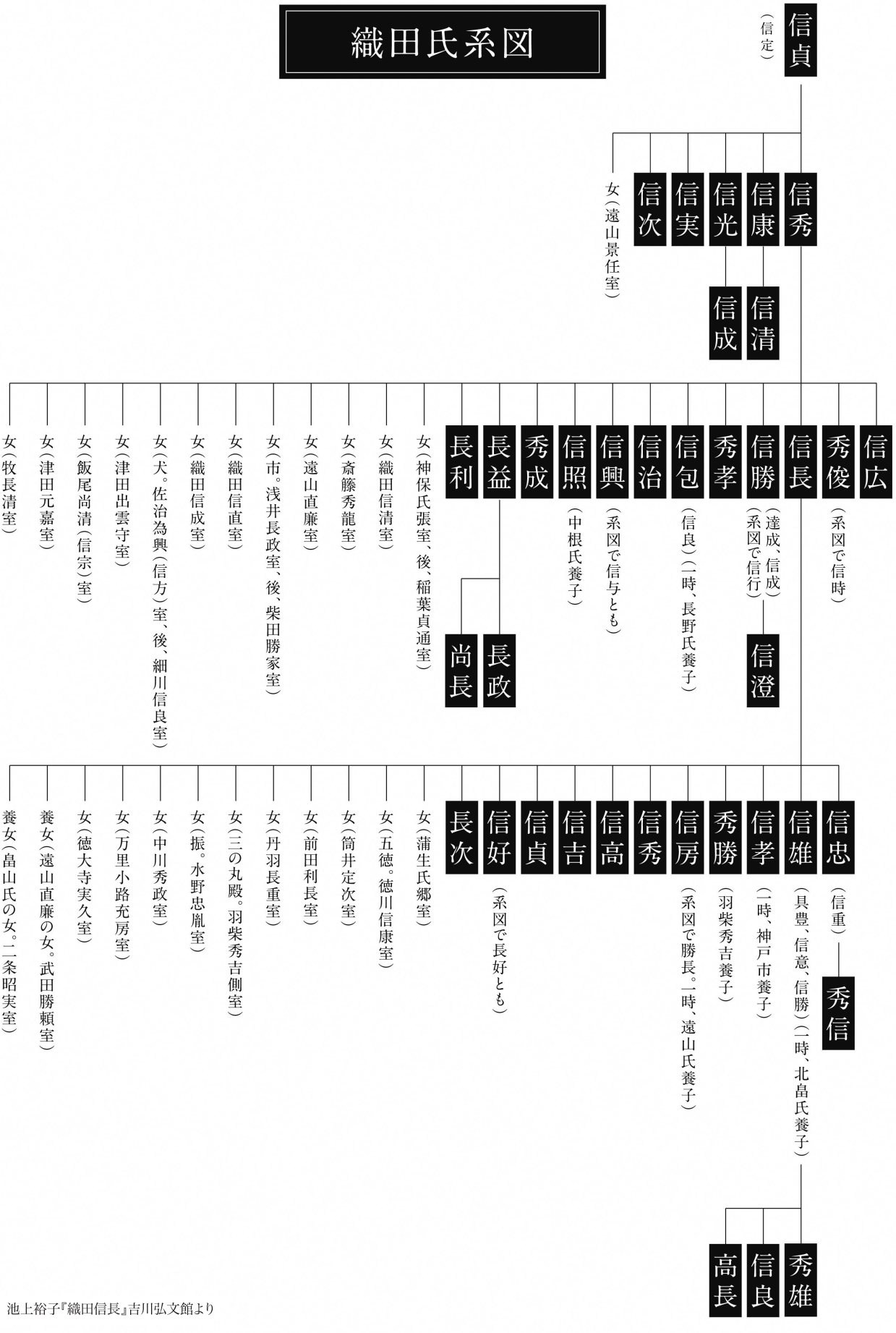
応仁・文明の乱と織田氏の分裂「伊勢守家」「大和守家」

織田氏が伊勢守と大和守に分かれたきっかけは、応仁元年（1467）に勃発した応仁・文明の乱による守護大名斯波氏の内紛だといわれています。伊勢守の織田敏広は西軍の斯波義廉につき、もう一方の大和守の小田井城主・織田敏定は、東軍の斯波義敏につき、両者の間で長い争いが続きます。応仁・文明の乱が収束した後、文明11年（1479）、度重なる幕府の介入もあって、伊勢守家が尾張上四郡（丹羽郡、葉栗郡、中島郡、春日井郡）を、大和守家が尾張下四郡（愛知郡、知多郡、海東郡、海西郡）を治めることで和睦したとされています。

大和守三奉行「弾正忠家」の台頭

当時の体制は、守護斯波氏の下、守護代の伊勢守（岩倉織田氏）、そして大和守（清須織田氏）の織田二家が仕え、さらにその大和守の下に、清須三奉行家として因幡守家、藤左衛門家、弾正忠家の三つの家が組織されました。こうした中で急速に勢いをつけてきたのが、弾正忠家の織田良信・信定父子です。海東郡津島を拠点に交易を押さえ、海西郡や中島郡へ勢力を伸ばし、勝幡城（海東郡、中島郡）などの城も築きました。さらに、信定の子の信秀（信長の父）の時代には、那古野城（愛知郡）も奪うなど、弾正忠家は、主家である大和守（清須織田氏）をも凌ぐ力をつけ、勢力を拡大していきました。織田信長は、大和守（清須織田氏）の配下にある、清須三奉行の一つ、弾正忠家の出身ということになります。

織田氏系図



池上裕子『織田信長』吉川弘文館より

1－2　父信秀

信長の父信秀は、守護代清須織田氏の配下三奉行の一つである織田弾正忠家に生まれ、大永7年（1527）には家督を継ぎ、勝幡城城主となりました。

弾正忠家は、「代々武篇の家」、つまり、主家をも凌ぐほどの勢力のある家といわれ、その中でも信秀は、『信長公記』の冒頭に「織田弾正忠」の名で記載され、「取分け器用の仁」と紹介されるなど、才能や力量が非常に優れていると評価されています。



織田信秀木像（万松寺蔵）

尾張・西三河圏 勢力拡大

織田信秀は、尾張、西三河に数々の城を獲得して勢力を拡大していきます。策略家でもあった信秀は、天文7年（1538）、那古野城（名古屋市中区）の城主である今川氏豊を追放し、居城としますが、氏豊が尾張守護の斯波義統の妹婿にあたることを利用し、あらかじめ連歌などを通じて接近し、油断させた後に攻略したといわれています。その後、天文8年（1539）に古渡城（名古屋市中区）を築城し尾張における拠点を整備していきます。

一方で、天文4年（1535）、松平清康が暗殺され混乱する松平氏の隙を突き、三河への侵攻を開始します。天文9年（1540）に安城城を落とすと、天文11年（1542）には「第一次小豆坂の戦い」で今川軍を破り、その勢力を西三河においても拡大していきます。

この勢いを背景に信秀は、守護家、守護代家から対外的な軍事指揮権を勝ち取り、織田一族の中で最も力のある実力者となっていきますが、天文17年（1548）には末森城（名古屋市千種区）を築き、その地位を盤石なものにしました。



伝織田塚改葬地（円徳寺）

美濃進出から苦境へ

尾張、西三河へ勢力を拡大すると、信秀の気持ちは美濃へと向かいます。

天文13年（1544）当時の美濃国主は土岐頼芸（ときよりなり）でした。頼芸と対立した兄頼武の子、二郎（頼純）は母の実家である越前の朝倉氏にかくまわれていました。頼純を支援するという大義名分のもと、信秀は朝倉氏と手をむすび、美濃に攻め込むことになりました。同盟を結んだ上で朝倉氏とともに南北から一斉に美濃に攻め入り、一時は、美濃西部に位置する大垣城の奪取にも成功します。

しかし、稲葉山（いなばやま）城を攻める最終段階になって、頼芸の家臣だった斎藤道三（さいとうどうさん）の働きにより、信秀は大敗を喫します。

この加納口の戦いでは、織田方の戦死者が5,000人に上ったと伝えられています。その屍（しかばね）を集め葬（ほうむ）り弔（とむら）うために、当時、上加納にあった浄泉坊（じょうせんぼう）に「織田塚」が築かれました。織田塚は後に円徳寺に改葬され、岐阜市の指定史跡となっています。その後も信秀は美濃に攻め込んでいますが、東方から勢力を伸ばしてきた今川氏に対抗するため、美濃攻略を断念し、斎藤道三との同盟を模索するようになりました。

揺らぎ始める尾張・西三河

尾張においても信秀の周りは穏やかではありません。天文17年（1548）には犬山城主・織田信清と楽田（がくでん）城主・織田寛貞（とおさだ）が謀反を起こし、信秀は一旦これを鎮圧しますが、同年、大和守家の織田達勝（みちかつ）の跡を継いだ信友が古渡城を攻めたことにより、再び大和守家と争うことになります。また同年、「第二次小豆坂の戦い」で今川氏に敗れ、続いて発生した「第三次安城合戦」で安城城を失うなど、次第に今川氏、斎藤氏、そして尾張国内の敵などに苦しめられるようになります。

信秀の晩年

天文17年（1548）、信秀は古渡城から末森城に居城を移し、同年、嫡男の信長と斎藤道三の一女濃姫（帰蝶）の縁組みを取り交わし、その翌年には濃姫を古渡城に迎え入れます。『美濃国諸旧記』には、重病に陥った信秀が存命中に婚儀を取り計らうよう斎藤道三に催促をしたとの記載があります。これまでの三河、美濃への同時侵攻の無謀さを改め、後を継ぐ信長には、道三との和睦による北方面の安定を残そうとしました。また、この頃、信長への家督継承が行われたという説もあります。

信秀の死

天文21年（1552）3月（『万松寺過去帳』）長年の病の末、信秀が他界します。享年41もしくは42。

なお、織田信秀の没年には、天文17年（1548）冬（「織田系図」）、天文18年（1549）3月（『寛政重修諸家譜』）、天文19年（1550）、天文20年（1551）3月3日等諸説あります。このように諸説あるのは、信秀の喪を意図的に伏せたためともいわれています。



小豆坂古戦場（岡崎市指定史跡）

1－3　信長のうつけぶり

信秀の嫡男として生まれた信長は、若い頃「尾張のうつけ者」と呼ばれ、町中の噂人となっていました。「うつけ者」とは今でいう「馬鹿者」という意味ですが、信長のうつけぶりについては、さまざまな解釈があります。

尾張勝幡城に誕生

信長は天文3年（1534）5月に尾張国（愛知県）の勝幡城（稲沢市・愛西市）に生まれます（尾張那古野城という説もある）。

幼名は吉法師。母は土田政久の娘といわれ、異母兄に三郎五郎信広、その同母弟に安房守秀俊がいました。

乳母を困らせた幼少期

幼少期には、乳母のなり手を探すのに苦労するほど、とても行儀が悪く、所構わず小便を撒き散らすような、手のかかる子だったともいわれています。そんな子にもかかわらず、父信秀は、大変可愛がっていたようです。

町中をうろつく不良少年

少年期の信長の身なり、振る舞いについては、『信長公記』に、「湯帷子（浴衣）を袖脱ぎにして着、半袴。火打ち袋やら何やらたくさん身につけて、髪は茶筅髷、それを紅色とか萌黄色とかの糸で巻き立てて結い、朱鞘の大刀を差していた。」とあります。

腰に瓢箪をぶら下げて町中を歩きまわり、人目もはばからず、栗や柿、瓜や餅を食べ、領主の子らしからぬ変わった服装で、奇妙な行動をとっていたといわれ、その姿が町の人には奇異に映り、その結果「大うつけ」と呼ばれるようになったようです。

信長の初陣

天文15年（1546）、古渡城で元服すると、翌年には初陣を飾ります。『信長公記』には、駿河勢（今川方）の軍が入った吉良大浜へ向かい、手勢（一説には800名ほど）を指揮してあちこちに火を放ち、その日は野営して、翌日那古野へ帰ったと記されています。

緊迫した戦いではなく、通過儀礼のようなものではなかったかといわれています。



「初陣の図」林羅山賛（拓植修氏蔵）

父信秀の葬儀での奇行

その「うつけぶり」については、天文21年（1552）、父信秀が病死したときの万松寺での葬儀の逸話がことに有名です。

「長柄（ながえ）の太刀と脇差を藁縄（わらなわ）で巻き、髪は茶筅髷に巻き立て、袴もはかない」という、葬儀には似つかわしくないおかしな格好で遅れてやってきた信長は、抹香（まっこう）をかっとつかんで信秀の位牌に投げつけて帰っていきました。その時、弟の織田信勝は、折り目正しい肩衣（かたぎぬ）・袴を身にまとい、しっかりとした作法で立ち居振る舞いを行なったため、兄である信長の「うつけぶり」がより一層際立ったといわれています。

ただ、大抵の者が、信長をうつけ呼ばわりするなかでただ一人、筑紫（つくし）から来た旅の僧だけが「あの方こそ国持ち大名になるお人だ」と言ったという話も『信長公記』には記されています。

天文22年（1553）、信長の傅役（もりやく）（教育係）でもあった平手政秀は、このうつけぶりをたいそう嘆き、「信長公を守り立ててきた甲斐がないので、生きていても仕方がない」と、切腹したといわれています。信長は政秀のために、師である沢彦宗恩（たくげんそうおん）を開山として、春日井郡小木村に臨済宗の政秀寺（せいしゅうじ）（後に名古屋市中区に移る）を建てて弔いました。

大うつけの意味

信長の「うつけぶり」にはさまざまな解釈があります。既成の秩序からはみ出した行動は、形式主義を嫌う信長の性格の表れとも考えられますが、一方では、尾張の実力者父信秀の後継者として暗殺される危険を避けるため、また、信長の真の敵対勢力が誰かをあぶり出すためなどの目的で、信長があえて、「大うつけ」を演じたという説もあります。計算された演技かどうかは不明ですが、少年時代にくだけた格好で町に出ることで、「領主の子」ではなく、ごく自然に人々と接し、商人たちの生の声が聞けたことが、その後の信長の政策に役立ったことはあながち間違った話ではないと思われます。

1－4　濃姫（帰蝶）との結婚

「美濃の蝮」と呼ばれた斎藤道三の娘で信長の正室となった濃姫（帰蝶）とは、いったいどんな女性だったのでしょう。濃姫について記された資料は少なく、詳しいことは不明ですが、信長との結婚までには、戦国時代ならではの希有な人生があったようです。

濃姫の血縁

濃姫は美濃の国の斎藤道三とその正室・小見の方との間に生まれたとされています。小見の方とは、東美濃長山城城主の明智光継の娘で、明智光秀の叔母にあたるとされています。すなわち、濃姫と光秀は従兄妹の関係ということになります。生年は天文4年（1535）とされ、信長の1つ年下です。「美濃の国の姫」として「濃姫」と呼ばれていたようです。また、『美濃国諸旧記』には、帰蝶という名前も出てきます。



信長公像と濃姫像（愛知県清須市清洲公園内）

信長との結婚までの道のり

天文13年（1544）、越前の朝倉氏と尾張の織田氏は頼芸（よりなり）の兄の子、頼純（よりずみ）を支援して、美濃に攻め込むことになりました。頼芸を擁する斎藤道三は加納口の戦いで織田信秀を打ち破りましたが、大垣城は織田氏に奪取されたままになりました。その後も織田氏・朝倉氏の介入は続きます。天文15年（1546）、斎藤道三は朝倉氏と手を結ぶため、娘を頼純に嫁がせ、頼純は美濃に帰還しましたが、その翌年には道三によって殺害されてしまいました。

その頃、道三と信秀は、大垣城を巡り争っていましたが、なかなか決着が付かず、結局、和睦することとなります。ここで信長と濃姫の結婚話が浮上します。『信長公記（しんちょうこうき）』には平手政秀の才覚で、和睦と信長・濃姫の縁組みがまとめられたと記されています。また、『美濃国諸旧記』には、天文18年（1549）2月24日に、数えで15歳の濃姫は信長に嫁ぎ、媒酌人（ばいしゃくにん）は明智光安だったとも記されています。

なお、頼純に嫁いだ道三の娘が濃姫だったという説もあります。

濃姫遺髪塚

本能寺の変で信長が自刃したときに、濃姫もともに闘死したという説もあります。家臣の一人が濃姫の遺髪を持って帰ってきて、埋葬したといわれているのが濃姫遺髪塚です。昭和20年（1945）7月の岐阜大空襲で焼失しましたが、それから30年後の昭和50年（1975）に墓の碑文が見つかり、西野不動堂（岐阜市不動町）に再建されています。

濃姫遺髪塚



結婚後

濃姫は正室でありながら信長との間に子供はなかったといわれています。『勢州軍記』によると、信長は天正3年（1575）、側室・吉乃との息子・信忠に家督を譲る際、信忠を濃姫の養子にしたとされています。

その後の濃姫の記録は少なく、斎藤家の菩提寺常在寺に父・道三の肖像を寄進した（時期不明）と寺伝にあるのを最後に、濃姫は歴史の記録から姿を消しています。このため濃姫は没年も不明であり、菩提寺も戒名も特定されていません。

道三の信長に対する評価

濃姫が道三のもとを発つときのこと、道三は「もし信長がまことのうつけであったなら、この刀で信長を刺し殺せ」と濃姫に懐刀を手渡します。濃姫は「承知しました。ですがこの刀、父上を刺す刀になるやも知れません」と答えたというエピソードがあります。

また、次のようなエピソードもあります。

道三は濃姫を嫁がせた後、尾張の国境にある正徳寺で信長と会う約束をします。当時の信長は「大うつけ」との評判だったので、道三は少し早く寺に向かい、信長がどんな格好で現れるかを寺で待ち確かめようとします。

寺に到着したときの信長は、評判通りとんでもない格好をしていました。それを見た道三は「やはりうつけであったか」と思います。しかし、対面の場に現れた信長はきちんとした装束に着替えており、道三は大変驚いたといわれています。

対面後に外へ出ると、織田方は立派な軍容をしており、それにも道三は驚いたといわれています。そして、家臣の猪子兵助に対して「我が子たちはあのうつけ（信長）の門前に馬をつなぐようになる」と述べたと『信長公記』には記されています。

1－5　父信秀の死とその後の尾張国



信長の天下取りの陰には、父信秀の残したさまざまな功績がありました。争乱の時代の真っただ中、若き信長は、実力本位で主家をもしのぐ地位を築き上げた信秀の遺産を受け継いでいきます。

尾張国内の争乱

信秀の死は、尾張国内外でさまざまな動揺と争乱を生み出します。

信秀の織田弾正忠家は、あくまで分家で織田大和守家の下で働く三奉行の一つです。信秀は、本人の才覚のみで主家である大和守家をしのぐほどの地位を築き上げましたが、織田家の中では煙たがられていたともいわれています。

その信秀の死の直後から、弾正忠家の中で分裂の兆しが現れます。嫡男である信長は、信秀の葬儀のときの奇行により評価を下げ、代わりに次男信勝を押す者が増えていきます。信勝は、信秀居城の末森城に入り、柴田勝家、佐久間次右衛門などを家臣にして勢力を拡大していきます。

天文21年（1552）、信秀に重用されていた鳴海城城主の山口教継が、今川方に通じていたことが明らかになると、信長はすぐに鳴海城に向け出陣します。鳴海城からは教継の子九郎二郎が出陣し、両軍は赤塚で衝突します。この赤塚の戦いは勝敗がつかないまま両軍が引き上げることになります。

この戦いで、信長の鳴海城攻略は叶わず、さらに教継の策略により、沓掛城（愛知県豊明市）及び大高城（名古屋市緑区）も今川氏のものとなってしまいます。

同じ頃、信長の老臣、平手政秀の死により、信長の家臣団は動揺します。

清須勢力との戦い

守護の居城清須でも信長打倒の動きが始まります。この頃の清須城内では、守護の斯波義統も守護代の織田彦五郎（信友）も力を失っており、守護代家の家老坂井大膳が全てを取り仕切っていました。

天文21年（1552）、その坂井の策略で、これまで弾正忠家に従っていた松葉城と深田城が清須方に奪われます。信長はすぐに松葉城・深田城をめざして出陣し、守山城城主の叔父信光も応援の軍を出しました。それを遮るために清須城からも軍勢が出ます。両軍は萱津で衝突し、信長軍が大勝し両城を奪還します。この戦いにより、信長の実力は父信秀にも劣らないということが、尾張国内に広く示されることとなりました。

翌年、清須城で大異変が生じます。坂井大膳が守護代織田彦五郎と共謀し、守護斯波義統を殺害したのです。義統の子岩龍丸（後の義銀）は、逃げ出して信長に保護を求めました。守護の息子を擁した信長には清須攻撃の大義名分ができました。信長はすぐに清須城を攻めさせ大勝利を収め



清洲城（愛知県清須市）※平成元年（1989）に再建されたもの。

ています。

そして、天文23年（1554）、叔父信光は信長と事前に密約を交わした上で、坂井大膳の誘いを利用し清須城に入り、守護代彦五郎を襲って切腹させます。大膳は身の危険を察知し城から逃げ出すこととなります。信長は約束通り那古野（なごや）城を信光に渡し、自らが清須城に入りました。その後、信光は家臣に襲われて命を落とします。

弟信勝に勝利（稲生の戦い）

弘治2年（1556）になると、信長・信勝兄弟の間が緊迫してきました。信勝は信長の直轄地の篠木三郷（現春日井市）を押領しようとします。また、庄内川の際に砦も築きました。信長はそれに対抗して、川を渡った名塚に砦を築いて部将の佐久間（さくま）盛重（もりしげ）を置き、まさに一触即発の事態に陥ります。

8月23日、信勝の部将である柴田勝家と、信長では織田家をまとめられないと考えた信長宿老の林秀貞とその弟林美作守（みまさかのかみ）（通具（みちとも））が名塚の砦を攻めると、その知らせを聞いた信長は翌日に清須城を出陣し、両軍は名塚の南、稲生（いのう）（現名古屋市）で衝突しました。信長軍は信長自らが先頭に立って全軍を指揮し、兵数では劣っていたものの、見事に柴田隊を切り崩し、林隊に突進して林美作守を信長自らが討ち取り勝利を収めます。

信長は、母土田氏の懇願により、信勝を罰することはしませんでした。それだけでなく、信長に反抗した柴田勝家も、林秀貞も罪に問われることはありませんでした。

しかし、その後、信長は仮病を装い信勝を清須城に招き殺害します。

尾張平定

弟信勝との争いに決着をつけた信長は、尾張全域の平定を視野に入れて動き始めます。対象は尾張上四郡（かみこおり）の守護代家、岩倉織田氏です。

永禄元年（1558）、岩倉城当主の信安は二男を跡継ぎに立てようとして、長男信賢（のぶかた）と対立し城を追い出されます。こうした状況を見て、信長は岩倉攻めに出ます。犬山城城主の従兄弟、織田信清も信長に応じました。信長は岩倉城の北方にある浮野（うきの）（現一宮市）で信清軍と合流し、岩倉方と衝突します。そして激しい戦いの末、信長方が勝利を収めました。

浮野の戦いで勝利を収めた信長は、岩倉城を包囲して鉄砲と火矢（ひや）の攻撃を繰り返しました。岩倉城は数か月持ち堪えましたが、ついに降伏します。

永禄2年（1559）2月2日、信長は上洛し将軍足利義輝（あしかがよしてる）に謁見し、尾張平定を報告します。それは、尾張支配の正統性を国内はもとより、近隣諸国に宣言するためだったと考えられています。



織田信長肖像（崇福寺蔵）

1－6　桶狭間の戦い



織田家内の権力争いが収まった頃、西進する今川義元を攻略すべく「桶狭間の戦い」が起こります。信長は、この戦いで今川の脅威を封印し尾張国を完全に平定、美濃制圧への道を開きます。

今川義元の西方侵攻

天文23年（1554）、駿河・遠江を中心に勢力を拡大していた戦国大名の今川義元は、甲斐の武田信玄、相模の北条氏康との三者合意甲相駿三国同盟を締結します。これにより義元は西方の三河・尾張方面へのさらなる領土拡張を図ります。

村木城攻め

尾張と三河の境界あたりは、信秀の頃より織田・今川両陣営の争奪の場でした。その境界に本拠を持っていたのが水野氏です。水野氏は尾張緒川（現東浦町）、三河刈谷（現刈谷市）をはじめ広い土地を支配していたものの、織田・今川の二大勢力の間にあって、どちらかに属さなければ存続はできませんでした。初めは今川方に従っていましたが、水野信元の代で織田氏に鞍替えします。

今川義元は、信元を攻略するために緒川城の北の村木に付城を築きました。尾張東部が次々と今川方に落ちていく中で、信長はこのまま水野氏を見捨てるわけにはいかず、天文23年（1554）、緒川救援を決意します。

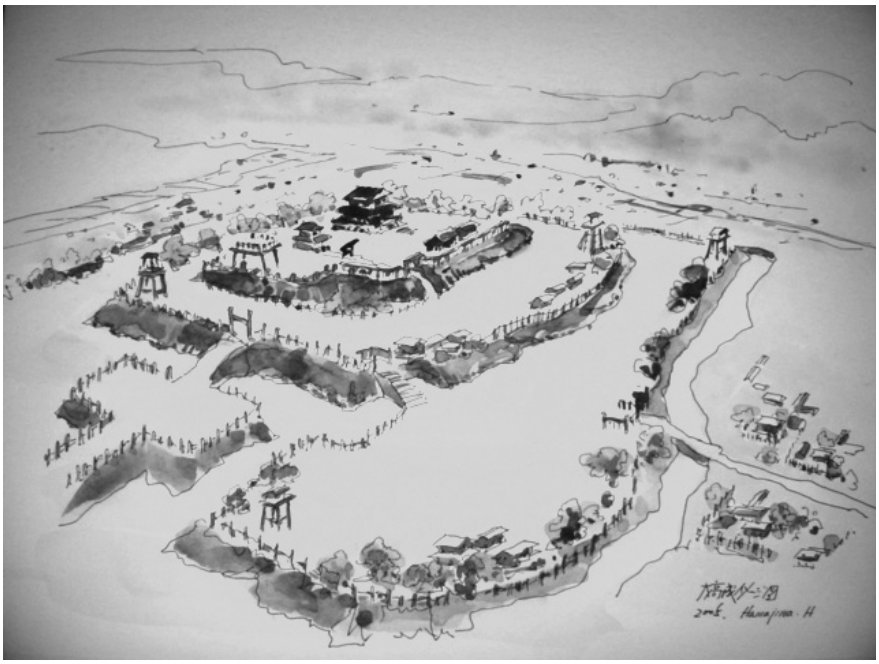
しかし、この頃の信長は清須勢力との戦いを続けていた時期であり、いつ清須から攻められるかわからない状態であったため、斎藤道三に助けを求め、部将の安藤守就を派遣してもらい、那古野城の留守を頼んで緒川をめざしました。叔父の信光も守山城を出て合流し、村木城を攻めました。朝から夕方までの激しい戦いの結果、今川方は降参しました。

その後、さらに、信長は鳴海城の周辺に丹下砦・善照寺砦・中嶋砦を、大高城の周辺には丸根砦・鷲津砦を築き対抗します。

今川義元侵攻開始

今川義元は永禄元～2年（1558～1559）頃、家督を嫡子氏真に譲り、尾張侵攻の準備を開始します。永禄2年（1559）3月には七ヵ条の軍法を定め、軍団の統制、戦闘能力強化を図るとともに、8月には朝比奈泰朝に大高城（現名古屋市）在城を命じ、10月には軍勢と兵糧を補給して着々と準備を進めます。

そして、ついに永禄3年（1560）5月12日、今川義元は大軍を率いて尾張を目指し、駿府から東海道を西へ侵攻し、5月17日に沓掛城に入ります。今川軍の軍勢は25,000ともいわれています。



大高城俯瞰図（大高まちづくり協議会所蔵）

5月18日、織田方は清須城での軍議にて、籠城するか出撃するかで紛糾するものの、信長は一向に戦うそぶりを見せることはありませんでした。

翌19日、松平元康と朝比奈泰朝が織田軍の拠点である丸根砦、鷲津砦に攻撃を開始すると、事態が動きます。信長はこの知らせを聞くと、幸若舞（こうわかまい）「敦盛（あつもり）」を舞った後に出陣の身支度を整え、明け方の午前4時頃に、小姓衆と岩室長門守（いわむろながとのかみ）、長谷川橋介（きょうすけ）、佐脇良之、山口飛騨守（ひだのかみ）、加藤弥三郎のわずか5騎のみを連れて清須城を出発します。同日の8時頃、熱田（あつた）神社にて軍勢を集結させ、熱田の大神に戦勝祈願を行なったといわれています（戦いに勝利した信長は、お礼として後日、熱田神社に信長塀なる城壁を造営します）。

同日の10時頃には、信長率いる織田軍は鳴海城を囲む砦である善照寺砦にて、2,000から3,000の軍勢を整えたといわれます。

その頃、丸根砦では今川軍の先鋒松平隊の猛攻を受け、織田軍は城外にて応戦するものの、大将の佐久間盛重（さくまもりしげ）が討死します。鷲津砦でも籠城戦を試みますが、飯尾定宗、織田秀敏が討死、飯尾尚清（いいのおひさきよ）は敗走しました。大高城周辺を制圧した今川軍は、義元率いる本隊が沓掛城を出発し、大高城へと進みます。一方、織田軍は同日の正午頃、簗田政綱（やなだまさつな）の知らせにより桶狭間の方面に敵軍が存在することを察知し、進軍を開始します。

信長出陣の報が届くと、織田軍中嶋砦の前衛の佐々政次、千秋四郎らは士気が上がり、今川軍に攻撃を仕掛けますが、逆に討ち取られます。義元は丸根、鷲津両砦の陥落に加え緒戦での勝利に気を良くします。

豪雨後の決戦

同日の13時頃、織田軍は「石水混（いしみずま）じり」の豪雨に乗じて兵を進め、義元の本隊に奇襲をかけます。今川軍の総勢は25,000であったとされますが、本隊で義元を守る兵は5,000から6,000に過ぎず、また地形や天候を活用した信長軍の戦略の結果、最終的には大将同士が直に刀や槍をふるう乱戦となりました。

義元は300騎の親衛隊に護衛されながら退

却しようとしましたが、織田軍の執拗な攻撃で護衛兵を失い、ついには織田軍に追いつかれます。『信長公記』には、服部一忠を返り討ちにしたものの、毛利新介によって組み伏せられ、討ち取られたと記されています。また、『改正三河後風土記』には、義元は首を討たれる際、毛利の左指を喰い切ったと記されています。

総大将義元の戦死により今川軍は戦意を喪失し、織田軍が勝利を収めます。

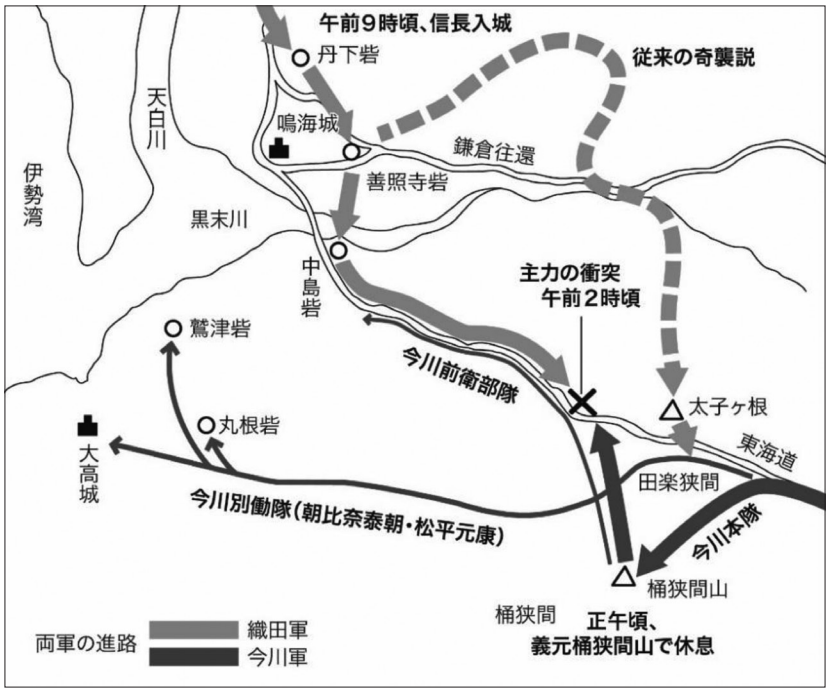
このとき、義元の首を取った服部小平太や毛利新介にも増して、義元の居場所を知らせ、奇襲に貢献した簗田政綱がより多くの褒賞を得たとのことで、信長が戦を進める上で、いかに情報を重要視していたかが窺われます。

合戦後の情勢

大将の今川義元や松井宗信、久野元宗などの有力武将を失った今川軍は、駿河に向かって後退しました。大高城を守っていた松平元康（のちの徳川家康）も、敗走の途中、大樹寺（松平家菩提寺）で敵方に取り囲まれ、祖先の墓前で切腹を試みますが、そのとき、13代住職登誉天室が「厭離穢土　欣求浄土」を説き、切腹を思いとどまらせます。元康はその教えを書した旗を立てて奮戦し、織田軍の兵を退散させ、辛くも岡崎城にたどりつきます。以来、元康はこの言葉を馬印として掲げるようになります。元康は駿府へ戻ることなく故国三河で自立を図り、今川方とは対立関係となります。

織田軍は義元を討ったことで勢い付き、同年の6月21日に沓掛城を攻略するなど、一連の戦いで西三河から尾張に至る地域から今川氏の勢力を一掃します。

今川家の当主が討ち取られたことで甲相駿三国同盟の関係は崩れ、越後の長尾景虎（上杉謙信）が台頭し、また、武田氏による駿河今川領国への侵攻（駿河侵攻）が開始されます。信長と武田氏は永禄初年（1558）頃から外交関係を持っており、永禄8年（1565）頃には信長の養女が信玄世子の勝頼に嫁ぐなど関係は良好でした。



桶狭間の戦い（谷口克広『信長の天下布武への道』吉川弘文館より）

1－7　美濃に出兵

尾張をほぼ平定した信長の次の目標は美濃の平定でした。義父である斎藤道三（さいとうどうさん）との関係は良好でしたが、道三は家督を譲った子と戦い命を落とします。道三亡き後、美濃とは再び敵対関係となります。

道三の最後（長良川の戦い）

信長が尾張国内の争乱に苦しんでいた頃の天文23年（1554）、美濃では斎藤道三が隠居させられ、嫡男の義龍（よしたつ）が当主となります。道三は、義龍よりも弟である孫四郎や喜平次らを可愛がっていたこともあり、義龍とは不仲だったといわれています。弘治元年（1555）に義龍は弟たちを殺害します。

翌、弘治2年（1556）4月、道三は義龍に戦いを挑み、長良川の戦いが起こります。17,500の義龍軍に対し、2,500の兵の道三が長良川河畔で戦い、道三はあえなく戦死します。享年63。このとき、信長は木曽川を渡ってかけつけますが、間に合わなかったといわれています。



道三塚（岐阜市）

織田氏と斎藤氏は同盟関係にありましたが、道三亡き後は再び敵対関係になっていきます。

しかし、この時期の信長は一族との争いと今川氏への対応に追われ、美濃を攻めることはありませんでした。

一方、義龍は信長の異母兄信広と通じて清須城を乗っ取ろうとしたり、岩倉城の織田信賢（のぶかた）を応援したりして、しばしば信長を攪乱していました。

美濃攻め開始

永禄4年（1561）5月、長年攻防を繰り返した斎藤義龍が急死します。享年35。そして、まだ14歳の斎藤龍興（たつおき）がその跡を継ぐことになります。

義龍の死の知らせを聞くと、信長はすぐに出陣し、森部（もりべ）（現安八町）で斎藤軍と戦い、斎藤方の長井甲斐守、日比野下野守（しもつけのかみ）をはじめ170余人を討ち取ります（森部の戦い）。

信長軍は斎藤軍が明け渡した墨俣砦（すのまたとりで）を修築し、そこを足掛かりとして侵攻を続け、十四条（現本巣（もとす）市）で再び斎藤軍と衝突します。義龍亡き後の斎藤軍はまだまだ結束力があり、ここでの戦いは勝敗が付かないまま終わりました。

1－8　徳川家康との同盟

桶狭間の戦いで今川義元が信長によって討たれると、それまで今川氏に従属していた松平元康（のちの徳川家康）は岡崎城に戻ります。元康にとっては駿河の今川残党からの脅威があり、また、尾張国の信長にとっては美濃との抗戦があり、やがてお互いの利害から同盟締結へと進んでいきます。

松平元康対今川氏真の抗争

松平元康は岡崎城に戻った後、今川氏と同族の吉良氏など、三河における今川氏に加担する勢力を攻め、三河の支配権を取り戻そうとします（善明堤の戦い、藤波畷の戦い）。

元康は今川義元の跡を継いだ嫡男氏真が義元の仇討の出陣をしないことを理由に、今川氏から完全に離反します。そして、永禄4年（1561）、氏真が家臣の吉田城代小原肥前守鎮実（大原資良）に松平側の人質を城下の龍拈寺口で殺害させたことで、元康は今川氏と完全な敵対関係となり、尾張国の織田氏に協力を求め、家臣の石川数正を交渉役として、信長との同盟を模索します。

一方その頃、信長も、美濃の斎藤氏と交戦が続く状態で、三河や駿河など東側の安定化を図るためには、元康との同盟が得策であると考えていました。

清須同盟締結

その翌年の永禄5年（1562）、清須城に於いて、ついに信長と松平元康の間で正式に同盟が締結されました。清須同盟の名で知られていますが、織田、徳川の文字に因み、織徳同盟ともいわれています。信長の一連の戦いで、西三河から尾張に至る地域まで今川氏の勢力が一掃されたことで、元康は以後、公然と今川氏と敵対して、松平氏の旧領回復をめざし三河の統一を進めていきます。また、信長にとっては東から攻められる危険を回避でき、以後美濃の斎藤氏との戦いに専念できるようになり、急速に勢力を拡大していきます。この同盟は信長死後も、天正12年（1584）小牧・長久手の戦いまで破られることはありませんでした。



徳川家康肖像（東京大学史料編纂所所蔵）模写

1－9　清須城から小牧山城へ

信長の躍進を支えた戦略の一つに、積極的な居城の移転があるといわれています。通常、戦国大名がひとつの城にこだわって居続けるのに対し、信長は次に攻める地を考慮し、より有利な場所へ次々と居城を移していきます。小牧山城への移動も美濃侵攻を目的としたものでした。

美濃攻めの拠点

美濃攻めの拠点として選ばれたのは、広大な濃尾平野に孤峰を保つ小牧山でした。早速、丹羽長秀を奉行として小牧山山頂に城を築き、永禄6年（1563）7月には主要兵力を小牧山城に移しました。また、麓には城下町が建設されました。

城移転時の秘策

この小牧山移転には、知略に長けた信長の一面を示すエピソードがあります。

織田家の中で、清須から北方面へ城を移すという噂が囁かれると、家臣の多くが不服に思い動揺しました。守護所として長年栄えた清須から他の地へ移ることへの抵抗が大きかったからです。そこで信長は一計を案じ、小牧山よりさらに北方の丹羽郡二ノ宮山（愛知県犬山市楽田地区）に城を築き移転すると布告しました。予想通り清須城内は反対一色となりましたが、信長は反対意見が十分に出つくした頃を見計らい、家中の意見を吟味した結果として、移転先を小牧山に変更することを申し渡しました。すると、今度はほとんど反対意見もなく、皆小牧山への移転に同意したといわれています。この逸話の真偽は不明ですが、信長の人間心理を巧みに利用する様を伝えたものとされています。



小牧山城（小牧市歴史館）

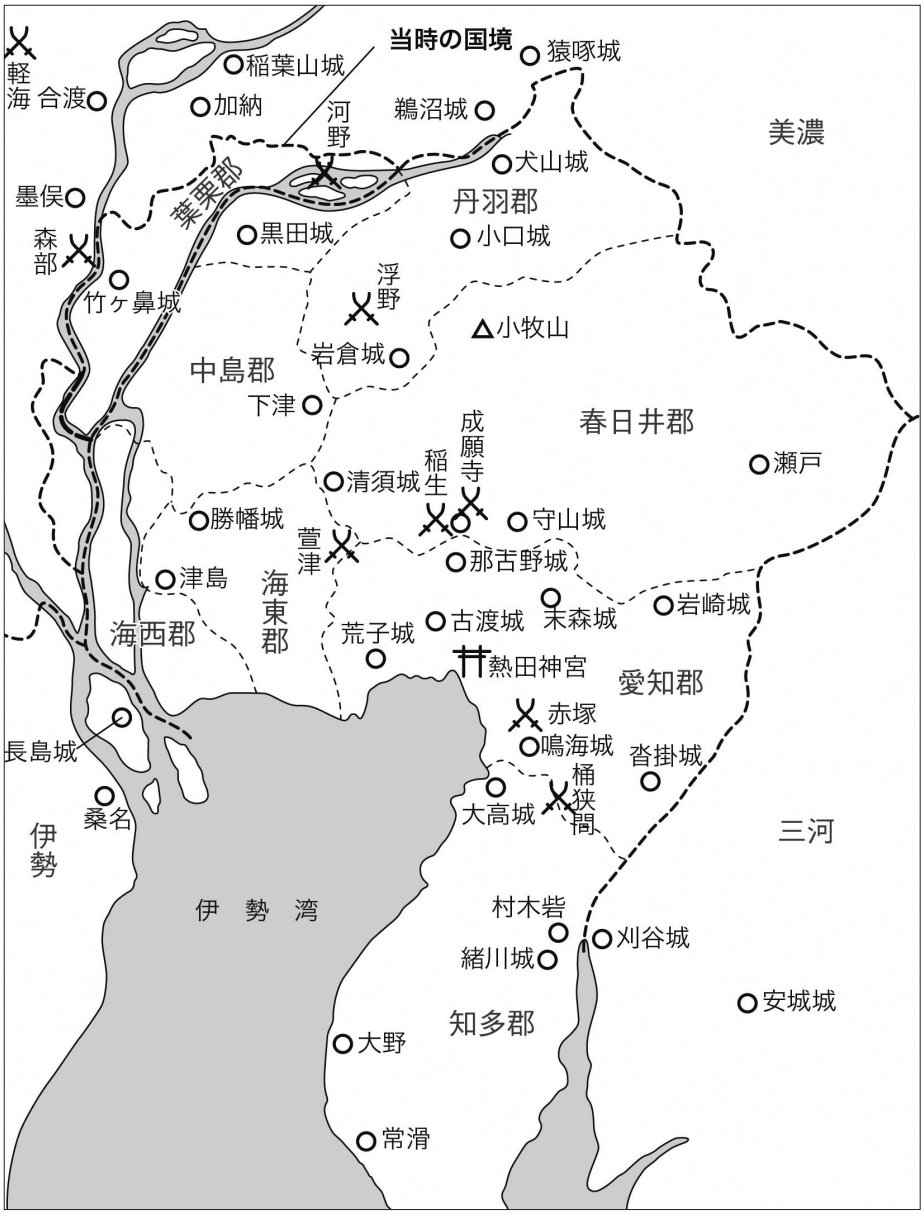
小牧山城

小牧山城は信長が初めて築いた城として有名です。その構造は、山全体を城域とし、多数の曲輪（くるわ）と重臣の館から成っていたといわれています。ま

た、山麓南側から西側にかけては、清須から移転させた城下町が形成されました。

移転後、信長は小牧山城を本拠地として美濃への侵攻を繰り返し、永禄10年（1567）には美濃稲葉山城を落城させ、今度は稲葉山城を岐阜城と改めて移住します。これにより、小牧山城は約4年間の役目を終え、廃城となりました。

なお、短期間しか使用されなかった小牧山城は、従来、美濃攻略のための土塁による仮住まいの城と考えられていましたが、平成16年（2004）からの発掘調査で、城の主郭の四方を石垣で囲んだ本格的な城であったことが判明し、長期滞在も考えていた可能性が指摘されています。



尾張要図（谷口克広『信長の天下布武への道』吉川弘文館より）